

2003年冬季海外研修とエベレット・コミュニティ・カレッジ (Everett Community College = EvCC)

安 保 邦 彦

目 次

はじめに

1. EvCCにおける冬季海外研修

- (1) 現地に着くまで
- (2) 滞在中の見学先について
- (3) 行事の総括
- (4) プログラムの行事以外のこと
- (5) 総合評価

2. エベレット・コミュニティ・カレッジ = EvCC について

- (1) エベレット市
- (2) EvCC
 - (イ) なぜカレッジで学ぶのか
 - (ロ) 四半期制 (クォーター) の講義
 - (ハ) 編入学コース (トランスファー)
 - (ニ) 講義を聴講して
 - (ホ) カレッジの運営
 - (ヘ) 図書館・メディアセンター
 - (ト) キャンパスの様子
 - (チ) 学長との懇談続話

3. スノホーミッシュ郡の経済振興策

はじめに

米国・ワシントン州にあるエベレット・コミュニティ・カレッジと東邦学園短期大学との交換学生プログラムは、1986年から続いている。しかし東邦学園大学の発足に伴い初めて行なう今回の派遣プログラムは、色々な意味で過

去とは異なった側面を有するのである。その第一は、4年制大学が始まって初のプログラムであること、第二は、学生だけでなく初めて社会人が加わった混成メンバーである、第三は、従来夏に行っていたツアーを今回は冬季に開催したことに加え、イラク情勢が開戦かどうかの緊迫した情勢下で旅行をしたことなどである。

一行の年齢構成は16歳から72歳までと幅広く学生7名 (うち高校生1名)、社会人4名の参

表1 参加者名

区 分	学籍番号	氏 名
一般用		石 建 和 子
		桜 井 武 子
		柴 田 町 子
		早 川 敦 子
		戸 谷 仁 美
学生用	RB01235	古 田 尚 美
	RB01279	山 名 麻理乃
	RB02162	二 宮 大 輔
	RB01237	舞 秀 晃
	RB01065	景 山 善 朗
	RB01169	高 柳 正 和
引率者		安 保 邦 彦

加者で出発した。こうした様々な事情を持ったプログラムであり、今後の継続的な発展策を探るためにも旅行記録を残すべきであると考え、ワシントン州周辺のカレッジおよび大学事情とあわせまとめたものである。日本ビジネスインスティテュートの真由美先生から本文について色々とお教示頂いたことを附記して感謝に替えたい。

1. EvCC における冬季海外研修

事前学習と現地での行動予定表

(1) 現地に着くまで

▽出発前の学習=もっと早くやって欲しかったという声があった。クレジットカードの発行、写真、おみやげなどの準備に時間がかかるからだと思われる。

▽往復の日程=14日は名古屋空港への集合が朝

表2 旅行事前学習と現地行動予定

1. 事前学習

2月2日(土)、8日(土)の2日間に3回の事前学習を実施

回	月 日	時 間	内 容	講 師
1	2月1日(土)	13:00~14:30	アメリカ丸ごと体験ツアーについて	国際交流委員会
2	2月1日(土)	14:40~16:10	アメリカについての基礎知識 (社会、経済、文化、生活、危機管理等)	岡部 一明 (東邦学園大学助教授)
3	2月8日(土)	13:00~14:30	ホームステイのための英会話	西崎有多子 (東邦学園短期大学助教授)
	2月8日(土)	14:40~16:10	旅行業者説明会	旅行代理店

2. 現地でのスケジュール

2月14日(金)~2月23日(日) 10日間

月 日	午 前	午 後
2月14日(金)		名古屋空港発→バンクーバー→シアトル→ エベレットコミュニティカレッジ→ホストファミリー
2月15日(土)	ホストファミリーとの休日	
2月16日(日)	ホストファミリーとの休日	
2月17日(月)	・シアトル市内観光	
2月18日(火)	・ボーイング社見学 ・航空機博物館見学	・英会話クラス
2月19日(水)	ウィンター・スポーツ体験 (Snow Shoe Trip)	
2月20日(木)	・EvCC学生との交流授業	・英会話クラス
2月21日(金)	・ワイナリーツアー/Volunteer of America (NPO団体) 訪問	・英会話クラス ・さよならパーティー
2月22日(土)	エベレットコミュニティカレッジ→シアトル→バンクーバー→	
2月23日(日)	名古屋空港着	

の7時、出発が9時であるが、成田に着いて待ち時間が7時間あった。帰りは午前5時半、出発場所に集合、バス出発が同6時で、名古屋空港到着が翌日午後7時半頃でかなり体力と忍耐力を要した。このアクセスに関する不満が多かった。帰りは女子学生を中心に若者はバテ気味であった。

▽現地に着いて＝14日午後2時、予定通りEvCCに到着した。受け入れ先の日本ビジネス・インスティテュート（NBI）にピザパイなどが、どっさり用意されていた。実は、昼食を取り損なう恐れがあると思い、正午近くに途中のハンバーガーショップに寄りバスの車中で食べてもらった。カナダでは、バス車中での飲食は禁じられているとの事だったが、特にお願ひした。気を利かせた積りだったが、連絡不十分のため参加者に迷惑をかけてしまった。

また、着いてすぐホスト・ファミリー宅で休日2日間という日程であったが、2、3日たってから休日が欲しいという人があった。なぜなら英語が話せない、聞き取れない、相互のことがわからないので相手の家庭に入っていけないという理由からである。頭が真っ白になった（無論、髪の毛のことではない）という人もいた。

(2) 滞在中の見学先について

評価が分かれたのは、航空機博物館、ボーイング社見学、ワイナリー訪問、雪山など。参加者に書いてもらったアンケート回答と筆者の取材に基づき日程順に感想を記述したい。

▽シアトル市内観光

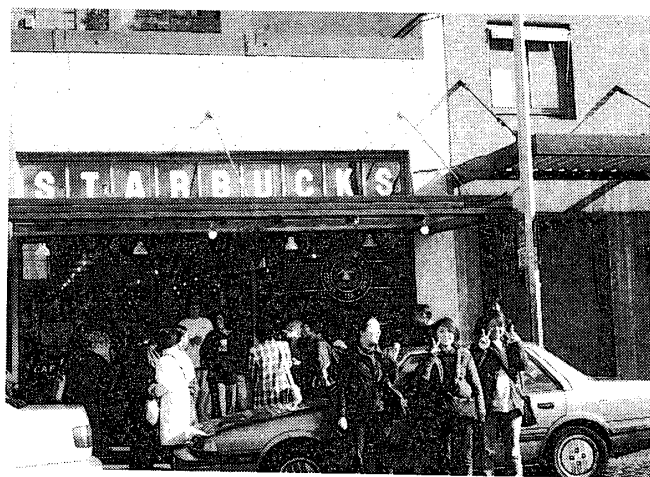
市内のビルにイチローの大きな写真が貼ってあったり、生鮮食料品の大きなマーケット（パイク・プレイス・マーケット）前にスターバックスの第1号店があるなど誰でもが楽しめた。

世界でコーヒーのチェーン店を展開しているスターバックス社は、1971年4月、シアトル市のパイク・プレイス・マーケット前で開店したのである¹⁾。創業者は、ゴードン、ジェリー、ゼブの3人で本物のコーヒー愛好者だけを対象に店を開いたのである。

これを大きく発展させたのが、ニューヨーク生まれのハワード・シュルツである。1987年にまだ零細企業であったスターバックスに入社し、1987年から同社の会長兼最高経営責任者（CEO）をしている。

1号店は、創業当時と同じように店の前でバイオリン弾きが曲を奏で、開かれたままのバイオリンケースにお客が金を入れていく。店内に入ると、カウンターの後ろに世界各地のコーヒー豆を入れた容器が置かれている。左側の棚には、コーヒー用具が所狭しと並んでいる。この風景も創業当時と変わらないようである²⁾。

興味をひかれたのは、入口の右側のテーブルの上に置かれた求人広告であった。公募していたのは、バリスター（店頭でコーヒーを入れる人）、交代制勤務の管理職、マネージャー補佐、店長などで、社員になる利点として①退職金貯蓄プラン、②ストックオプション（値上がりしたら自社の株式を購入できる権利）供与、③



スターバックス1号店（シアトル市）

コーヒーおよび関連商品の割引などが書かれていた。同社は、社員の退職率の低いことで知られているが、“次のステップを考えなさい”という見出しの求人パンフレットが先ず目にとまったのである。

ところで前日の日曜日の新聞を見ると、土曜日には、イラク攻撃に反対する大掛りなデモがシアトル市内のメインストリートで行なわれたとあった。そうした抗議行動のあったと思われる繁華街を散策したが、清潔で静か、安全面も問題なく安心して一人歩きができた。

▽ボーイング社航空機博物館およびボーイング社組立工場

博物館は、古い飛行機の展示と修復工場を兼ねており、ボーイング社を退職した人がボランティアで働いている。展示物の中では、ボ社の旅客機では最古の247Dが珍しい。1930年代初めの商用機で現在、世界に4機保存されているが、飛行可能なのはここに置いてある飛行機のみという。

双翼で世界最大のソ連製飛行機や世界初のジェット旅客機の修復も行なわれていた。敷地内にインキュベータ（創業したばかりの企業を育てる施設）があり、15社が入居中であった。入居部屋の一つの区分が、2,000スクエアフィート、月の家賃が約30万円であった。入っているのは、エレクトロニクス、航空機関連、ホットタブ（風呂）、人形づくり等している会社で平均社員数は2名から3名ということであった。

説明をしてくれた女性は、修復の技術屋さんで、自分で小型機を分解、組み立て飛ぶのが何よりの楽しみという仕事に輝いている顔が印象的であった。この後、隣接するボ社の最終組み立て工程をビルでいうと8階くらいの高さから見学した。工場建設は、1967年、世界最大のジェット旅客機747型機を生産するため始めら

れ1968年に第1号機が完成した。その後、767,777型機を製造するため3回にわたり拡張された。

工場は、広くてフットボールの競技場75、バスケットのコートが911も入る位である。世界最大でギネスブックに記録されている。

▽雪山歩き

カスケード山（標高二千呎）の麓で、日本でいう「かんじき」のような器具を履き雪山道を歩いた。出発前に聞いていたのは、スノーシューズ持参だけであった。現地のスポーツ用品店の人が事前に説明に来た。必要な靴は、スキー用の本格的な靴ということだったが、賃貸料は無料になった。装備も変化する天候にあわせてサングラスから日焼け止め、靴下など、完全装備の上、下服が必要といわれその店で買った人もいた。幸い、当日はまあまあの天候で良かったが、山の積雪量は半端でなかった。万一、天気が荒れ模様となると、完全防水の装備が必要とわかったが、現地でそれがわかり準備不足の人もいた。

天候は、わずかに雪の降る程度で軽い運動になった。スキーできるところのロッジで休憩した。山は、静かで人もあまりいなくて、美しい自然を満喫した。リフトのあるところでは、個人的にはスキーをしたくなった。



雪山歩き

▽ワイナリーツアー

エベレットからバスで40分くらいのところにあるシャトウ・セイント・ミシェル (Chateau Ste. Michelle) というワイン製造所を訪れた。州内のコロンビア峡谷で取れるぶどうを原料に製造している。創業は、1934年で、ワシントン州では、最も古い醸造所のようにであった。カスケード山脈から生ずるシアトル特有の雨の多い、海洋性の気候が、原料のぶどうづくりに幸いているとの事であった。

ただ、工場見学は、ワインづくりは、休みの時節であり、試飲は21歳以下は禁止とあってやや時間を持て余した人もいたようである。

▽NPO (非営利団体)・フードバンク訪問

フードバンクは、恵まれない人々に対して食糧の配給をしている NPO であり、食糧の備蓄センターとなっている。エベレット市内には、このフードバンクの下に20のフードセンター (食料品を配給する場所) があり、更にその末端組織として13のスープサービス場がある。ここから食糧の支給を受けられるのは、①リストラでレイオフ (職を失った人) された人、②移民、③家庭内で暴力を受けた人、④その他生活に困っている人である。

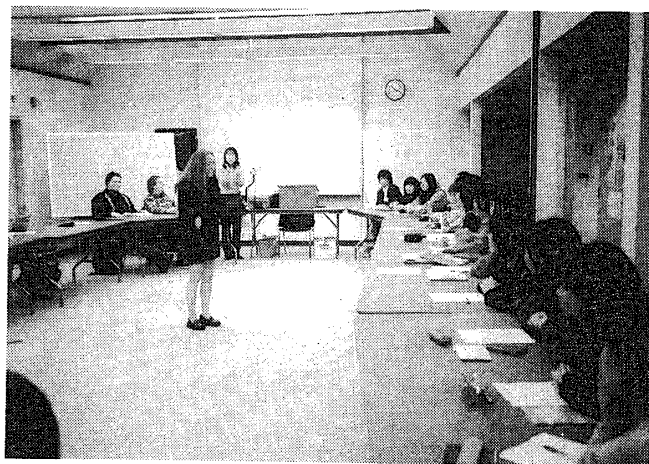
フードバンクの専任職員は、10名、毎日平均して15名のボランティアの人が食糧の仕分けなどを無給で働いている。私達は、事前に手を洗い豆などの仕分け作業を手伝った。食料品は、配給を受ける当事者が1ヵ月分まとめて取りに来る仕組みで、フードバンクが食糧を購入する資金は、公的資金、寄附のほかに自己資金となっている。この中では、寄附金の割合が最も大きいそうで、郡役所 (カウンティ=日本の県に相当する) が寄附金を募るキャンペーンを行なう。具体的には、郵便配達人が配達先に寄附金用の袋を置いて後から回収する。

また Thrift Shop という日本でいうリサイ

クル・ショップみたいな中古品を売る店がある。そのうちの一家を訪ねたが、衣料品を中心に本、家具、おもちゃなどを格安 (衣料品は数ドルが多い) で販売している。店内の衣料品の値札には、赤札が75%引き、青札が50%引き、黄色の札は25%引き、緑は毎日低価格と掲示してあった。面白いことにレジでは、年齢により60歳以上、70歳以上とか高年齢になるにつれ更に値引きがあったことである。こうした店の利益が、フードバンクなどへ寄附されると聞いた。

▽英会話教室と EvCC の学生による交流授業

アン先生による英会話教室は、合計3日間行なわれたが、大変にわかりやすいと皆から好評であった。EvCC で日本語を学ぶ米国人の学生との交流授業が、20日 (木曜日) に行なわれた。日本側が折り紙を教えたり、あるいは相互に演技を行いその内容を米側は日本語、日本側は英語で言い当てっこをした。さらに米国人学生が、日本人に質問事項を日本語でたずね、その内容を日本語で記録する授業もあった。米国人学生の日本語のうまいことに感心した人が多かった。



動作している内容を英語でいう

▽サヨナラパーティー

終始なごやかであった。真由美先生、引率者

の私の挨拶に続き、学生たち、社会人も1名を除き、英語で感謝と思い出を読んだ。うち1名は涙で絶句、しばらく読むのを中断した。この後、ステイ先の家庭の感想がそれぞれあり日本食を楽しみ歌ったり、歓談などで楽しく過ごした。羽織姿でパフォーマンスした男子学生もいた。

▽受け入れ家庭と交流会における演出度

習字、折り紙、歌、オモチャづくり、演出力は、大人が抜群であった。学生は圧倒される場面が多かったが、遅れずうまくついていったから、間延びしたり、気まずい雰囲気になることは皆無であった。

(3) 行事の総括

訪問先については、年齢、男女別により興味の対象が異なるため評価する人とそうでない人とにわかれる。ワイナリー訪問が、その例であろう。飲酒については、21歳以下は禁止が厳格に守られている。ワイナリー訪問の際は学生にきちっと事情を説明してわかってもらった。左党には、誠に良い企画と思われるが、評価が異なるのは、今回の多彩な構成メンバーによるためで致し方がないと思われる。ワイナリーを除けばおおむね評価は、高かったと思われる。

現地学生との交流、また NPO 訪問では、もっと交流の時間が欲しい、EvCC のキャンパス散策などの機会があればという要望もあった。しかし、限られた時間内の行事であっただけに、今回の訪問では、難しいと思った。

現地の Mayumi N. Smith (真由美先生) さんの細かな準備で問題なく日程をこなせた。英会話教室、日本語を学んでいるエベレットの学生との交流授業は学生も社会人も同じメニューであった。社会人には、きついかたと心配したが、社会人の人達は日本で英会話教室に通っている方ばかりで、場慣れしており問題なかった。

た。

(4) プログラムの行事以外のこと

▽ホスト先の状況

シングルマザー、結婚式の二次会屋さん、ボーイング社関係の勤め人、簡易宿舎 (B&B) の経営者など。ただし、夜の行動はマチマチ。朝4時半に出勤の人は、9時頃に早く寝てしまう。若者のいる家庭は深夜まで連日シアトルへドライブなど色々であった。中には、日本通で日本語しかしゃべろうとせず、ステイした人の悩みとなり私も様々なアドバイスを試みた。社会人の中には、日本の若い女性の子育て援助をボランティア活動で行っている人がいた。彼女によれば、ステイ先の一族郎党が集まると総勢28名になる。その際、祖母が、孫の子育てに一切口出ししないことに大変感銘したとの話を聞き、人生経験により見る目が違うなと感心した。

▽道中

行きはカナダから米国へ入るときに、バッグの中を全部見られたが、帰りはバスの中でパスポートを見せて終わり。その日の検査官によって随分とやり様が異なるとのこと。

▽東邦短大の卒業生

恒川直子さん (95年卒)、亀井桐子さん、溝端朋子さん (2000年卒) が顔を出し手伝ってくれた。いずれも東邦学園短期大学に在籍中にこの交換学生プログラムに参加した経験を持っていた。亀井さんは、EvCC に在学中、溝端さんは、同カレッジを今春に卒業し、プラクティカル・ビザでもう1年滞在し、社会人として働く予定である。恒川さんは、同カレッジを卒業後、ノーザンアリゾナ大学へ編入しコンピュータサイエンスを学んだ。恒川さんは雪山とワイナリーツアーに同行してくれた。

▽ NBI（日本・ビジネス・インスティテュー
ト＝日本語に訳されていない）

今回の研修を行なった施設で、日本の文化と
ビジネスを紹介する日本文化資料センターを兼
ねる建物である。館長は真由美先生で、コー
ディネータに Kathy（Kathleen Koss）さん
がいて滞在中に色々手伝ってくれた。元々、
NBI のプログラムは、1987年にアメリカ人の
ための、総合的な研究所として発足したもの
である。日本語を教えるだけでなく、日本の歴史
や文化、政治・経済ビジネス習慣までを知って
もらう目的であった。

その後、こうした目的を形にするため、日本
文化資料センターを作ることになり、建設案が
1995年にできた。96年には、大阪万博の益金
1500万円が支給されることになった。ただし、
これは、同額を自前で集めるという条件付で
あった。こうして、第1期工事として、1997年
にキャンパス内の既存の建物を改築・増築して
現在の建物が完成したのであった。続いて1999
年には、第2期工事としてお茶室、台所、教室
などができた。

更にこの4月からは、第3期工事として日本
庭園が作られ、エベレット市の姉妹都市である
山口県岩国市から同市で50年ぶりに行なわれた
錦帯橋の改築工事によって出てくる古材を使っ
て、特別に作られた橋が長い友好のシンボルと
して、EvCC に寄贈される。

NBI は、1995年からエベレット市と姉妹都
市提携している岩国市と姉妹港湾局提携をして
いる宮城県石巻市の要請で、中学生、高校生の
夏季短期英語、文化研修も行なっている。また、
1991年からは、岩国市役所へインターン
シップ事業として、アメリカ人を送っている
（18名が終了済み）。一方、米国から日本（東
邦学園へ）へ交換学生が来るのは1年おきだ
が、待機者が出ている状態である。

NBI は、1998年から在留邦人のための各種
プログラムも持っている。月例界、新年会、日
本語書籍の無料貸し出し、成人式、ピクニッ
ク、講演会等である。真由美先生自身は、広島
県出身で原爆は風化できない歴史となっている。
このため1990年から、エベレット市の有力
者を誘い日本紹介ツアーを何度も行なってい
る。来日の際は、広島市の原爆資料館に立ち寄
りありのままの日本を知ってもらっているそう
である。真由美先生らのこうした地道で、息の
長い日米を理解するための交流事業が NBI の
存続と活動を支えているのである。

▽ EvCC、Charles N. Earl 学長との懇談

2月18日（火）に Earl 学長と20分間、懇談す
る機会があった。EvCC は、州立であり州の補
助金が運営費の大半を占める。ところが、最
近、ワシントン州は、財政状況が悪化してお
り、これまで運営費の中で78%あった補助金
の割合が65%までに減額されやり繰りに苦慮し
ている話であった。

(5) 総合評価

「親子の触れ合い」が見られた。学生のいう
ことに大人が“それは、違うんじゃない”とか
言って諭すと学生が黙って聞いたり仲良くその
話題で語り合っていた。本当の親子では、最
近、あまり見られなくなったほほえましい風景
であった。また、女子学生が“参加した大人の
女性を見ていると、生き生きして自分の人生を
楽しんでいる。お母さんは家の仕事ばかりで、
かわいそう、帰ったら外国へ出られるように応
援してあげる”との会話も聞こえてきた。反対
に大人も学生の話に耳をかたむけていた。これ
は混成になっていることの良い点であった。

季節については、夏のほうが良いと思われ
る、冬季は北陸と同じような天候であるが、名
古屋よりは寒くなかった。期間はもう少し長く

したほうが良いと思う。ただし、今回でも料金的が高いという人が5名おり、夏にするとお金の点でどうか？学生のうち4名は、アルバイトで稼いで来ていた。早くから宣伝して少しずつ貯金して参加するように積極的に働きかける必要を感じた。前述したように参加者、受け入れ先の家庭も期間が短いと言っていた。確かに2週間程度が望ましいが、社会人となるとそれだけ家庭を空けることができるかどうか心配である。

過去の研修旅行では、40名以上が参加し、期間も長く現地の研修修了者に単位を与えたこともある。この場合は、旅行前から特別のクラスを取ることが義務づけられており、行く前の授業＋研修中の成績＋研修後のレポートの総合成績で単位が与えられたらしい。

学生が少ないという今回の参加状況は、1) 短大を取りまく環境の変化、2) 発足したばかりの4年制大学が本格活動までの調整期にある、3) 長引く経済不況で学生側に経済的ゆとりがないなどの影響の現われと思われる。1986年以来、続いているエベレット・コミュニティ・カレッジとの交換学生プログラムは、参加者がその後留学するなどの成果をあげている。我々は、こうした過去の遺産を守りながら、第二の発展期を迎えるべく努力する必要がある。

▽打ち上げ式＝帰りの飛行機の中で、社会人の参加者の中から「オリエンテーションがあったのなら、ファイナル・パーティーがあってもおかしくない」との声があがった。そこで参加者の一人、影山君のアルバイト先の居酒屋で反省会を兼ねた飲み会を企画した。当日の2月28日は、岡部先生、西崎先生と参加者全員が出席し賑やかに語り、再会を誓い合った。

終わりにあたって、現地での受け入れは、万

全の準備がなされ、連日の行動にも手拔かりが全くなかったことに感謝したい。真由美先生、Kathyさん、事前および事後（出迎え）にご足労願った東邦学園大学の岡部先生、深谷先生、同短大の西崎先生、国際交流委員会の藤井さん、二宮さんなど関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

以上

〈注〉

- 1) ハワード・シュルツ/ドリー・ジョーンズ・ヤング 著、小幡輝雄/大川修二訳『スターバックス成功物語』日経BP社、1998年、p42
- 2) 前掲書 p32

2. エベレット・コミュニティ・カレッジ＝EvCCについて

(1) エベレット市

ワシントン州エベレット市の人口は、9万人、ボーイング社の城下町といった感じである。また、市内には北米西海岸第二のヨットハーバーがあり、これに隣接して海軍基地がある。近隣のシアトル市には、マイクロソフト社の本社やスターバックス社の第1号店の存在がよく知られている。ワシントン州は、ハリケーン、洪水、竜巻（トルネード）といった米国で厄介な災害に見舞われることはなく、また、温暖で治安もよく米国人が最も住みたがる地域の一つである。

(2) EvCC

ワシントン州には、34のコミュニティ・カレッジあるいはテクニカル・カレッジがあり、それらのカレッジで連盟を持ち役員会を開いている。州立EvCCは、創立が1941年とワシントン州で最も古いカレッジである。現在のキャンパスへは、1958年に移転してきており、13の

煉瓦づくりの建物が散在し、北東には市営のメモリアル・パークゴルフコースが広がっている。各建物には、「カスケード」、「インデックス」とかの山の名前がつけられている。1999年には、科学的な実験室やテレコミュニケーション施設、コンピュータ資格を取るための設備を持つ技能訓練センターを開設している。

(イ) なぜカレッジで学ぶのか

これまで日本の場合、短期大学と4年制大学は住みわけができており、それぞれ学業年限を終え在籍した短大、大学を卒業していくのが通例である。米国では、カレッジへ入学するのは教育内容が充実していることと大学に比べ授業料が安いからである。一般的に見て、大学は、講義を聞く人数も何百人と大人数で、研究を重視し、これに対してカレッジは小人数で教育を重点しているといわれる。どうせ4年間勉強するなら、2年間は大学より割安で教育熱心なカレッジで学び専門教育を編入した大学で受けようというのがその主な理由である。

EvCCの正規のコースは、学位をとって大学の編入を目指す正規コース（トランスファーという）や資格取得を目的とする専門技術コースである。このほかに成人向け基礎教養コース、米国市民権取得コースのほかに難民を対象にした会話、読解、作文力をつける外国語としての英語（ESL）無料コースなどがある。

メインキャンパス以外に7つの専門技術学校を開設している。例えば、航空機保全技術学校（Aviation Maintenance Technical School）とか美容術学校（School of Cosmetology）、フィットネスとスポーツ学校、技能教育センター、高等学校教育修了プログラム等である。

米国では、高等学校や大学へ入る場合、入試のようなものはない。大学、カレッジへ入学する際、問題になるのは、①高校の成績、②SAT（Scholastic Aptitude Test＝大学進学

適性全国テスト）の得点、③リーダーシップ、④ボランティア活動などである。入学するのは、やさしいが卒業は難しいというのが一般的な傾向である。カレッジから大学への編入は、GPA（グレード・ポイントオブアベレージ）と呼ばれる評価点が重要である。4・0を100点とし、A B C D Eの評価点で最低2・0は要求される。

(ロ) 四半期制（クォーター）の講義

講義は、3ヵ月で区切り単位を出している。原則として、講義は、①早朝から始まり正午過ぎに終わる講義、②夜間開講、③週末開講、④遠距離学生のためのビデオ、インターネットを使った講義（日本の通信教育のような）に大別される。正規コースの場合、1クォーターで取

表3 州が財政援助している講義の授業料

単 位 数	米 国 人	外 国 人
1	62.65	234.35
2	125.30	468.70
3	187.95	703.05
4	250.60	937.40
5	313.25	1171.75
6	375.90	1406.10
7	438.55	1640.45
8	501.20	1874.80
9	563.85	2109.15
10	626.50	2343.50
11	632.56	2353.36
12	638.62	2363.22
13	644.68	2373.08
14	650.74	2382.94
15	656.80	2392.80
16	662.86	2402.66
17	668.92	2412.52
18	674.98	2422.38
19	731.69	2650.79
20	788.40	2879.20

出所：EvCC新聞2002年冬季号

単位はドル

得できる上限はない。20単位取る人もいるそうだが、15単位程度が多く、90単位を取れば卒業できる。毎日（月曜日～金曜日）行なう講義（50分単位）は、5単位が与えられる。このほか月、水、金曜日とか火曜、木曜といった具合に行なわれる場合もある。しかし、1クォーターで15単位取得することは、簡単ではないようである。登録は、春、夏、秋、冬に行うが、卒業のための単位の有効期限は10年間、この期間を過ぎると「単位を取得した」という記録に留まる。

講義は、州政府が支援しているものとそうでない講義にわかれる。当然、州政府が財政的助けている講義のほうが安い。ちなみに表1-1でわかるように政府支援の講義を15単位登録すると、米国人が656・80ドルに対して外国人は2392・80ドルと非居住者は高くなっている。ちなみに、ノーザン・アリゾナ大学の場合、授業料は、半年で6,000ドルだったという（恒川さんによる）。

（イ）編入学コース（トランスファー）

ワシントン州とオレゴン州とEvCCとの間には、編入学の協定がありカレッジで取った単位が4年制大学で卒業に必要な単位数として認められる。経営学専攻の登録用紙（科目名の一覧を記載）を見ると、編入とそうでないものが窓口を用意されている。編入用では、志望する大学の学科に必要な単位はどれか注意して取得するように書かれている。学生は、カレッジ卒業資格が得られるプログラムを終えるよう指摘している。

一方、編入学用でない登録用紙には、例えば卒業に必要な90単位を取得しても「編入学はできないので注意」と記載されている。同じ要領で、編入、そうでない用紙が、デザイン、エンジニアリング工学、簿記、会計などの専攻毎に用意されている。カレッジでは、季節毎に56分

程度の新聞を発行し、登録の仕方や時間割を詳細に載せている。カレッジの全コースの延べの登録者数は、年間2万人近くにのぼるそうである。

（ニ）講義を聴講して

2月20日午前9時から「社会文化人類学」の講座を聴講した。月曜日から金曜日まで毎日この時間に行なわれる講義で、時間は50分間である。先生は、クラークさんという女性で、時間通り9時に始まった。出席者は、33名、うち男性6名に対して女性27名で、遅刻者はいなかった。私語は、まったくなかった。講義の人数は、この程度が多いという。ゼスチュアたっぷりの講義で、世界には、5千から6千もの言語があることから始まり、中国やインドネシアの言語に関連した話で難しかった。

先生の質問には、必ず数名が挙手し答えていく。講義が、終わった後も何人かの学生が熱心に質問していた。

短期留学して単位を取得することは、英語の力がないと難しいだろう。というのは、講義の内容を聞き取る英語力を身につけるのに時間がかかるからである。東邦短大の卒業生は、先ずIEL（Intensive English Language）と呼ばれるクラスに入りそれから2年間以上かけてカレッジを修了していた。

この講義に限らず一般論だが、学生層は多様である。仕事を持った社会人、昼に働いて夜に来る人、シングルマザーになって次の段階を目指し単位取得に來学する人等々である。60歳以上の人には、時期、単位数を限ってだが、聴講無料の制度もある。

講義が終わった後にクラーク先生に聞いた話によると、遅刻は講義開始後認めるのは5分だけ、単位を与える条件は、①宿題をやったかどうか、②小テスト、③小論文、本試験の結果という。なお、4年制大学では、4年生になる

と、3ヵ月位にわたり、日本のビジネスインターンシップに相当する企業研修をする。企業から与えられたプロジェクトをこなし、企業から認められれば卒業単位が与えられる。企業と学生がうまく合えば、それが就職の機会になる場合もあるという。



講義風景

(ホ) カレッジの運営

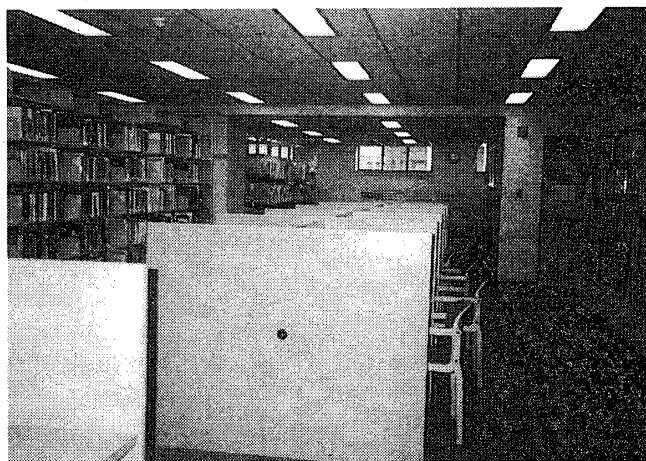
EvCCの方針設定は、学長の上に位置づけられる理事会が行なう。現在の理事は、5名で、産業界から3名、弁護士、公認会計士各1名の構成である。これらの理事は、コミュニティの中から選ばれ、州の知事が任命する。理事は、5年毎に更新されるが、最長で11年間勤めた人もいる。月に2回、理事会は開かれ理事長は1年毎に理事が順番に就任することになっている。学長、副学長、ディーン（学部長）など50名の管理職および175名の職員がカレッジの運営を仕切り、教務内容など大学の教学に関することは日本と同じように教授会が責任を持つ。

(ハ) 図書館・メディアセンター

学生ホールを備えた建物の半地下に図書館およびメディアセンターがある。蔵書は、4万冊、300種の雑誌などの定期刊行物と新聞、5千を超えるビデオカセット、コンパクトディスク、オーディオカセットを常備している。興味

を惹いたのは、開架図書棚の間に閲覧および学習用の机が並んでいることであった。日本の図書館では、見られない光景であった。

また、入り口付近に、話をしてもいい場所が設定しており、数名で学習する上で必要と思われる話をしている姿がみられた。さらに奥に入ると、静粛が求められる場所や個室の学習部屋がありそれぞれ目的に応じた住み分けがなされていた。日本のように図書館は、“静かに”と一律に決めていないことに「おやっ」と同時に「なるほど」と思った。



図書館内部

(ト) キャンパス内の様子

朝の1限目の講義は、午前8時に始まる。自動車通学が多く、キャンパス内は学生、教職員、来客用と駐車場が色分けしてある。徒歩の学生も含めて午前7時半頃から通学してくる。その代わり、午後1時頃には、キャンパスに人影はまばらである。午前中に講義が終わると、夕方までは講義はないからである。働く人の便宜を考えたカリキュラムからだと考えられる。

建物内は、全面的に禁煙で、キャンパスの数ヵ所に「喫煙ゾーン」が白線で印されている。ゴミなどは、落ちておらず非常にきれいであった。喫煙ゾーン設置は、3年程前からの措置だという。学生ホールには、灰皿は皆無で無

論、喫煙する学生はいない。

図書館上部の3階が、学生相談センター、学費援護相談センター、女性相談センターなど各種の相談センターとなっている。教員室が、図書館棟の西にあった。3階建ての最上階が、すべて個室に仕切られていたが、窓がなく東邦学園大学A棟教員室の半分くらいの広さであった。ドアの前には、“イラク攻撃に反対します”の文言が掲げている人もいて、自由な雰囲気を感じた。教師陣は、総勢345名で、うち125名が専任で、残りはパートタイムである。専任の中には、テニユアと呼ばれる終身在職権を持った教授がいるが、この資格を得るには学生を含む6名の委員が3年間評価して学長に推薦し理事会の承認により決めるという。職員は、常勤が175名、管理職50名の合計225名でパートタイムは含まれていない。教職員の合計は、570名である。



EvCC 学生食堂、図書館

(チ) 学長との懇談続話

Earl 学長は、電力公社勤めをしていた方で、教育畑出身ではない。2月18日の懇談で、Earl 学長から東邦学園の現状を聞かれた。そこで「日本は18歳人口が減るとともに大学界の自由競争が始まり大変である。短期大学の改革も急務」と現状を説明した。既に述べてきた通り、

米国と日本では、カレッジ、大学へ学びに来る学生の動機や学生層がかなり異なり運営方法にも差異がある。従って、日本の現状が、よく理解されたどうかは疑問である。この後、学長からは、前述したようにワシントン州から EvCC への補助金が最近、減額され苦しいと打ち明けられ「何かいい智慧はないか」と尋ねられた。

3. スノホーミッシュ郡の経済振興政策

2月20日に真由美先生の案内でエベレット市のあるスノホーミッシュ郡のマイケル・ケイド経済振興局局次長 (Economic Development Council, Vice President) にお会いすることができた。郡 (County) は、日本でいう県に相当する行政地域を意味する。

ケイド次長からは、郡内には最大はボーイング社のような従業員2万人を抱えた大企業から中小企業まで四万五千の企業があるとの説明があった。米国中小企業庁 (SBA) の下に SBDC (Small Business Development Center) という中小企業育成センターがある。その資金の50%は、SBA が出し、残りを州、地方の会議所、大学等が負担している。SBDC の傘下に、各地にサブセンターがあつて、カウンセリングやトレーニングを行っている。サブセンターは、地域の大学、経済連合会 (Economic Development Corporation = EDC) 等に置かれている。

また、SCORE (Service Corps of Retired Executive) という引退した経営者がボランティア経営診断員として中小企業主と一対一のカウンセリングをする制度の解説もあった。ケイド氏からは、こうした制度を生かし中小企業を成長促進させた具体例の説明があった。SBA は、ACE-Net と呼ばれるネット上で起業家とビジネスエンジェル (個人の投資家) をマッチングさせる仕組みを開発している。しかし、こ

のベンチャービジネス振興の新しい策は、まだ
郡内では活用されていなかった。

以上